

様式 1

完了報告書（平成 25 年度）

提出者 焦 堃

提出年月日

【プロジェクト名】

和文 後期陽明学派と明の政治についての研究

英文 About the Later-stage Yangming School and Ming's Politics

【メンバー構成】

研究代表者 焦 堃

幹事

メンバー

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

本研究は、陽明学という中国・明代を代表する思想、中でも嘉靖の末期から万暦後期までの後期陽明学と、当時の政治との関係を明らかにするため行われるものである。陽明学については、従来、「思想史」の分野で研究し、把握するのが主流である。一方、万暦十年以降に現れた、いわゆる「東林派」の士大夫たちについては、それらが陽明学者と同様に、いわゆる「新儒学」の枠に収まる思想を持ち、しかも陽明学者と度々論戦を行っていたにもかかわらず、その政治上の立場と政治行動がもっぱら注目される向きがある。事実、陽明学派の多くのメンバーも東林派と同様、官僚士大夫として積極的に政治活動を行い、明の政治舞台で重要な役割を果たした。本研究は陽明学派を政治史の視点から考察することと同時に、それぞれ違う側面に重心が置かれている、陽明学派と東林派の研究の間の掛け橋となることをも目指している。近年、陽明学派の政治活動に注目する研究が若干現れているが、その中でも嘉靖帝の治世の末期、つまり徐階が内閣首輔となってからの、後期の陽明学派についての研究が比較的少ない。さらに万暦十年以後、東林派の台頭とともに激しくなる党争との関連で、陽明学派が果たした役割を論じるものはほとんど見当たらない。このため、本研究は徐階の執政期間中の、陽明学派の政治性格および、それが東林派の台頭後、如何なる位置付けの下で内閣、そして東林派などの政治勢力と絡みつつ、政治活動を行っていたのか、ということ初步的に考察し、学界で問題提起する役割を果たしたい。

【活動の記録】

調査 1

年月日：2014.1.12 - 1.19

調査者：焦 堃

調査地：上海、杭州、寧波

調査目的：以上の三つの地方にある図書館での研究書と資料の所蔵状況

調査 2

年月日：2014.2.25 - 3.5

調査者：焦 堃

調査地：台北

調査目的：関連する研究テーマの台湾での研究状況

【成果の概要】（800 字程度）

嘉靖の初年から、陽明学第二世代、つまり王陽明より一世代下の陽明学者たちは中央政界で頭角を現し始めたが、彼らは政治において独裁の強化を狙う内閣とその背後にいる天子に反対する姿勢を示し、張璁・夏言さらに世宗からの様々な打撃を受け、政治上の不遇を強いられた。嚴嵩が首輔を務める時期になると、聶豹などの陽明学者は文学趣味を通じて嚴嵩に接近することができ、聶豹の弟子であり閣臣にまでなった徐階も嚴嵩に低い姿勢を取ることで、陽明学派は中央政界での勢力を温存することができた。そして徐階が内閣首輔となり権力を掌握することと、陽明学派は転機を迎え全盛期を現出させた。徐階は陽明学を大々的に奨励することで、自らの政権の支持基盤を固めた。彼は陽明学の政治理念に沿う形で、内閣による六部の政務への干渉をできるだけ避け、そして中・下層の官僚たちにも昇進ルートを開いた一方、自らと気脈の通じる陽明学者を吏部などの重要なポストに当てることで政治の主導権を掌握していた。一方で徐階は翰林院出身者として、張居正などの翰林院での後輩を引き立てることに熱心であり、万暦に入ってから内閣 - 翰林院体制の大復活の地ならしをした。万暦初頭に張居正が内閣の権力を強化を企図して以来、内閣と反内閣勢力との闘争が再燃したが、今度は東林派が現れて反内閣の旗手となり、陽明学派の一部をも吸収した。一方、徐階が政権を掌握した時期に翰林院に身を置いた閣臣たちは、陽明学寄りの姿勢を示す者が多く、内閣側に加勢する陽明学派の官僚も現れた。しかし、内閣と東林派との闘争が熾烈さを増していく中、翰林院に入った陽明学者たちも最後はやはり内閣に批判的な姿勢を無くしきれず、政権の中枢部から排斥された。これで百年近くの間、明の政治と関わり続けてきた陽明学派はついに解体し、中央政界から姿を消した。

【研究業績】

【通信欄】